

より蜂巣織炎は軽快したが、3月■外来にて施行予定だった心エコーを施行したところ右房内に浮遊するひも状血栓を、左房内に球状の血栓(ψ3×4 cm)を認め、同日当科転科となった。ヘルペス脳炎による見当識障害があり、手術は困難と判断し内科的治療を行う方針とした。下肢静脈造影を施行したところ前脛骨静脈に血栓認め、下肢静脈フィルターを挿入し、t-PA(クリアクター160万単位)投与。その後ヘパリンの持続投与を開始した。翌日右心房内の血栓は消失したが、左房内の血栓は著変なく、ワーファリンを開始したところ4月■左房内の血栓は消失した。今回偶然に両心房内血栓を発見し、合併症なく血栓が消失した症例を経験したため報告する。

### 2-1. On Pump beating CABG+Dor手術の三例

(外科第2) 小田切重人、飯田 泰功、三坂 昌温  
張 益商、清水 剛、石丸 新  
(金沢大学医学部・心肺・総合外科) 渡邊 剛

広範な心筋梗塞による慢性心不全に対しCABG+Dor手術を施行した3例につき検討した。

【症例1】42歳男性、重症3枝病変及び心不全にてCABG 5枝+Dor手術施行。術後経過良好で、術後CAGにてグラフト開存、LVEDV減少認め18病日に退院した。

【症例2】66歳男性、RCA、LCX完全閉塞、LAD 90%狭窄、重症心不全にてCABG 2枝+Dor手術施行。術後経過良好で、術後CAGにてグラフト開存、EFの改善認め16病日退院した。

【症例3】46歳男性、LAD完全閉塞、LCX 90%狭窄、心尖

部血栓形成にてCABG 3枝+Dor手術施行。術後経過良好で、術後CAGにてLAD中等度狭窄認めたものの、心機能改善認め、16病日退院した。

【結語】心筋梗塞による重症虚血性心筋症に対してOn pump beating CABG+Dor手術(endventricular patch plasty)は低心機能を改善させる有用な治療法であると考えられる。

### 2-2. カテラボハイブリッド冠動脈治療

(西東京中央総合 循環器科)

末定 弘行、首藤 裕、橋本 雅史  
雨宮 正、黒須富士夫、佐伯 直純  
(心臓・血管病低侵襲治療センター) 伊藤 茂樹  
(金沢大学医学部心肺・総合外科) 渡邊 剛

当院は内科と外科の垣根を取り外し、内科外科が一体となって循環器疾患の治療に取り組んできた。冠動脈疾患治療においては、めざましい進歩を遂げるPCIによりCABGの低侵襲化が求められ、この要求に応えるべく当院では平成12年より金沢大学渡辺教授によるoff pump CABGを標準術式とし、とりわけMIDCABを積極的に取り入れてきた。その一環としてpoor risk症例の多枝病変に対して、type A, BのRCA, LCX病変に対してPCIを行い、type C LAD病変に対するMIDCABをカテ室で一期的に行う“Cathlab hybrid procedure”を4例に対して行った。この治療法によりCABGのriskが高く、PCIのみでは対応し難い症例への治療適応が拡大されるものと考えられる。